思想の越境性を考える

—— オイゲン・ヘリゲルを再読

Stephan KÖHN (シュテファン・ケーン : Professor,
University of Cologne/Germany)

✉ stephan.koehn@uni-koeln.de

(ドイツ)ケルン大学日本学科教授。専門は日本近現代文学、近世出版文化、メディア史、ポップカルチャー。単著に*Traditionen visuellen Erzählens in Japan*(Traditions of visual storytelling, Harrassowitz, 2005)、*Traditionen idealisierter Weiblichkeit*(Traditions of idealized femininity, Harrassowitz, 2008)、共編集に*Prekarisierungsgesellschaften in Ostasien?*(Precariousness in East Asian societies?, edited with Monika Unkel, Harrassowitz 2016)、*Outcasts in Japan's Vormoderne*(Outcasts in premodern Japan, edited with Chantal Weber, Harrassowitz, 2019)など。

Some Reflections on Cross-Bordering Thoughts : Re-reading Eugen Herrigel

The German philosopher Eugen Herrigel can be considered one of the most influential intellectuals introducing Zen Buddhism to a Western readership in the twentieth century. His works translated in many languages achieved cult status with many readers in Europe and Japan, respectively. Herrigel, who worked for almost six years as a lecturer at the Imperial University in Sendai, was fascinated by Zen Buddhism right from the beginning and started practicing Japanese archery as an alternative for experiencing the mysteries of Zen instead of the usual way of ascetic meditation. It was therefore a happy coincidence that Herrigel became a disciple of Awa Kenzô, a very famous archer and charismatic founder of a new, spiritually oriented archery school of that time. When Herrigel finally returned to Germany, he began writing about his experiences with both Japanese archery, and Zen Buddhism. As one of the very few experts of that time,

who could claim that everything in his books is based on firsthand experiences, Herrigel became in next to no time an authority of Zen all over Europe. So, at first glance, Herrigel's work seem to be a prime example for a successful border-crossing of eastern thought. However, a critical re-reading of his work will demonstrate the difficulties of border-crossing - then and now.

Keywords Zen Buddhism(禅宗), Mysticism(神秘主義), Japanese Archery(弓道), National Socialism(国家社会主義), Eastern Thought(東洋的思想)

1 思わぬ再会

現在のドイツにおいて、オイゲン・ヘリゲル(1884-1955)という日本文化紹介の先駆者は忘れ去られた歴史上の人物の一人になってしまったように思われる。彼の1948年に出版された『Zen in der Kunst des Bogenschießens』(邦訳:『弓と禅』)は、戦後のドイツにおいて戦前をはるかに上回る、いわば第二の「禅ブーム」を引き起こし、代表的な東洋思想である禅に憧れを感じた一般の人々の先ず読むべき禅入門書となった。さらに、1958年に死後出版された『Der Zen-Weg』(邦訳:『禅の道』)は、特にドイツにおける仏教信者の間で禅の奥義書として大きな反響を呼び、これによりヘリゲルの「禅の達人」としてのイメージが定着した。だが、1980年代以降ドイツにおける禅の人氣が徐々に下火になり、今やヘリゲルの著作や彼の名を知っている人は少数派となってしまった感が否めない。ヘリゲルの「禅ブーム」も最早忘却の中に葬り去られたようである。

ヘリゲルの主な著作は比較的早い段階で

邦訳された。1956年には早くも、稲富栄次郎・上田武訳の『弓と禅』が出版され、また2005年には魚住孝至による新訳『弓と禅』が出た。現在に至るまで再版や改版が繰り返行われてきたことは、日本におけるオイゲン・ヘリゲルの高い知名度を示しているのではないだろうか。

興味深いことに、『弓と禅』の根底に流れる「東洋的思想」はドイツの弓道界においては、かなり敬遠されているものであるが、日本の弓道界においては、却ってこのヘリゲルが説く「東洋的思想」が高く評価され、例えば『現代弓道講座』という資料文献シリーズでも詳しく紹介されている。現在の日本においても、ヘリゲルは日本文化に精通した数少ない外国人の一人として、幅広く認識されていると言っても過言ではなからう。

オイゲン・ヘリゲルは、1913年にハイデルベルク大学哲学部にて博士号、1922年に教授資格を取得した後、1924年まで私講師として同大学の教壇に立った。1924年から1929年まで東北帝国大学にて哲学の講師を務めて、帰国後エアランゲン・ニュルンベルク大学からの招聘を受け、1929年に哲学部の教授となった。さらに、1938年には副学長、1944年には学長に就任した。敗戦後まもなく、ヘリゲルは戦争責任を問われ、教授職解任の処分を受けたが、1948年には正式に大学教授として定年退職することができた。ヘリゲルにとって、仙台に滞在した6年間は、「禅」ないし「弓」の探求のための最も貴重な期間であったに違いない。その滞在中の直接的な経験や体験があったからこそ、言葉、文化、国境を越えて日本思想を幅広く紹介する、20世紀前半における日本文化紹介者の第一人者となったと言えよう。

私事ではあるが、実は私も同イエアランゲン大学に勤めたことがある。そればかりか当時、大学附属図書館に所蔵されていたヘリゲルの遺留品を調べる機会にも恵まれたのである。長い間忘れてしまっていた、その時のヘリゲルとの「出会い」が、このコロナ禍の中、何かの弾みで突然思い出された。当時の資料やメモを手にとって再読し、まさしく思わぬ「再会」となったので、現在の水際対策などの大義名分による世界規模の国境規制や封鎖を背景に、約100年前に国境を超えたオイゲン・ヘリゲルを具体例に、思想の越境の可能性について改めて考えたいと思う。

2 他者の目から

元々中世ヨーロッパの神秘主義に魅かれていたヘリゲルは、日本の禅に出会った時、そこにこのヨーロッパの神秘主義と共通する点があることを強く感じた。来日後、禅の直接体験としての厳しい座禅修業は断念したが、その代わり1926年に禅の間接体験として「弓聖」と称えられる阿波研造(1880-1939)に師事し弓道を始めた。ちょうどヘリゲル来日の数年前から、日本の弓道界は大きく変わろうとしていた。日本におけるナショナリズムが高まる中、大日本武徳会などによってレジャー・スポーツとしての弓道は厳しく非難され、人間形成又は精神修養としての弓道がより強く推奨された。その結果、子供達の精神養成のため、弓道の授業は学校のカリキュラムにも導入され、一般向けの道場にも弓道の精神的指導を重視する指導者が増えていった。

ヘリゲルの指導者である阿波研造は、当時まさしくその時代の申し子であった。阿波は様々な弓道流派を修練し、1925年に「大射道教」という新流派を興した。この神道、儒教、仏教などの思想をユニークに融合させた新流派はかなりの反響を呼び、結果阿波は弓聖として全国にその名を広く知られることとなった。阿波にとって禅の修業と弓の修業は、根本的な違いはあるにしても、最終的に同じ目標(つまり、自然との一体化による人間完成)を持っているのであった。ただし、阿波が提唱した大射道教は、ヘリゲルが考えていたような禅の間接体験でもなければ、禅の悟りへの近道でもなかった。いやむしろ、阿波にとって、禅の教えは大射道教の世界観を説くための方便に他ならなかった。仏教概念に擬えた造語の使用が阿波研造の大射道教の特徴でもあれば、少なからず誤解を招く原因でもあったと言える。

ちなみに、教派神道の思想といくつかの共通点が見られる阿波の大射道教と違い、1926年に梅路見鸞(1892-1951)の興した「無影心月流」、1923年に大平善蔵(1874-1952)の提唱した「大日本射覚院」は、実際に禅の教えに基づく新流派で、弓道の修練を通して禅の悟りを開くことをその修練の最終的な目標とした。ヘリゲルが元々望んでいた「弓禅一如」の弓道はまさにこの二つの新流派によって実現されたのである。稽古中も通訳に頼らざるを得なかったヘリゲルは、恐らく大射道教が説く思想が禅ではなく神道に基づくことに、最後まで気が付かなかったのではないだろうか。そしてこの基本的な誤解が、結局ヘリゲルの禅研究の出発点となってしまった。

ともあれ、1929年にドイツに帰国したヘ

リゲルは、しばらく後弓道修業の経験をまとめ、執筆することを決めた。1936年に出版された講演録『Die Ritterliche Kunst des Bogenschießens』は驚く速さで翻訳され、同年に『日本の弓術』というタイトルで出版された。このヘリゲル弓道経験談の第一弾によると、「弓道の全ては禅であり、禅の全ては弓道にある」であり、弓道において経験、体験したことは、まさしく自分の求めていた「弓禅一如」に他ならないということであった。そもそも中世ヨーロッパの神秘主義を日本の禅思想の中に見いだそうとしていたヘリゲルは、同著で自分の弓道修業を禅の悟りを開くための修業として語っている。この話に当時のドイツ人読者がとりわけ魅力を感じたのは、次の三つの要素であると思われる。まず自分を悟りまで導く「先生」の存在、そして「問答」という禅書によく見られる会話形式、さらに発射の神秘的な原動力である「Es」(英語の「it」に相当)の存在である。

ヘリゲルの経験譚がドイツで出版された当時、日本もしくは仏教に興味のある読者は、無論ある程度「禅」に関する知識を持っていたと考えられる。1880年代頃、小乗・大乘仏教がドイツに紹介されてから、特に都市部を中心に仏教思想が広まり、さらに1910年代から日本の禅に関しての論文が次から次へと出版されるようになった結果、一般社会においても禅の知名度がだんだん上がっていった。禅に関して基本的な知識がある読者にとって、ヘリゲルが「ありのまま」に語った経験談は非常に斬新で、魅力的にも、また神秘的にも感じられたに違いない。

1948年に出版された『弓と禅』は、『日本の弓術』を土台にして、上記の三つの要素をさらに効率的に生かした著作であると言え

る。『弓と禅』では、ヘリゲル特有の「Es」の使用がことに目立つ。原文でも曖昧すぎて解釈の余地を多く残す「Es schießt」は、邦訳では「射られる」、または「「それ」が射る」となっており、日本語でも「Es」の意味が分かりにくいまま残っている。しかし読者にとっては、その分かりにくさこそが作者の「東洋的思想」に対する造詣の深さが窺える点だったのではないだろうか。10年後に出版された『禅の道』では、ヘリゲルはそのユニークな解釈をもっと広げて、日本文化の全てが「Es」に還元され、又その全てが「Es」から発生するとまで論じた。まさしく、「知る人ぞ知る」の世界である。

3 他山の石

禅の思想をドイツに紹介した先駆者として、ヘリゲルの功績は確かに大きい。だが、その責任もまた大きかったと言わざるを得ない。ヘリゲルは1938年に国家社会主義ドイツ労働者党に入党する前から、国家主義の思想に陶醉したか、または翻弄されたかのように思われる。1936年の『日本の弓術 (Die ritterliche Kunst des Bogenschießens)』で既に、日本における武士道の精神を賛美して、現代日本兵士が母国のために自分の命を躊躇なく捧げるという理想像に帰結させた。1936年に日独防共協定が締結された後、同盟国になった日本の文化は脚光を浴び始め、さらに1938年の日独文化協定の締結後、積極的に書籍、講演、興行などの形で幅広く紹介されるようになった。言うまでもなく、その中でも日本の武士道はとりわけ注目を集めた。しかし、当時の武士道人気の波

に乗ったヘリゲルは、ここで日本文化紹介の第一人者として、完全に失格と言えるような論文を上梓する¹。1944年出版の小論「Das Ethos der Samurai」(邦訳:「サムライのエトス」)において、特攻隊の飛行士について触れ、天皇のために潔く自分の命を犠牲にする、いわば現代のサムライをドイツ兵の模範として説いてしまったのである。

ヘリゲルが見た日本文化は、あくまでもフィルター越しに見た日本文化にすぎなかったと思われる。確かに、彼の様々な著作によって禅思想は新たに国境を超え、ドイツに伝来し、そこでかなりの人気を呼んだ。ただし、この禅思想は、もはやヘリゲルがのちに主張し続けたような「ありのまま」の形ではなく、むしろドイツのナショナリズムに移植、そして定着させやすい、歪曲した形で浸透していったと言わざるを得ない。この元々の文化の紹介者は、知らず識らずのうちに、文化の創造者になってしまった。

現在のコロナ禍の中、ほぼ10年前に集めた、ヘリゲルに関する資料やノートを再読し、日本文化の研究、またその紹介の難しさを改めて痛感した。そして、果たして、ヘリゲルの二の舞を踏むのを避けられるのか、と言う疑問や不安も同時に浮かんできた。結局、自分なりのフィルターの存在を意識しながら、日本の思想、文化、文学などを越境させるしかない。固定観念に囚われず、また復興した感のあるナショナリズムにも翻弄されず。これは、私にとって今後の研究の大きな課題の一つとなるだろう。

¹ 戦後の非ナチ化運動の影響で、このようなイデオロギー色の強い思考はヘリゲルの著作から完全に消えてしまった。